

# 想 創 奏

第27号

平成23年05月20日

発行人 荒川輝男  
編集人 林 直輝  
〒536-0013  
大阪市城東区鳴野東 3-18-5  
社会福祉法人そうそうの杜  
Tel 06-6965-7171  
Fax 06-6167-2622

未曾有の大震災を目の当たりにして

社会福祉法人 そうそうの杜  
理事長 荒川 輝男

2011年3月11日午後2時46分車を運転し、城東区蒲生4丁目の交差点で信号待ちをしていると、目が回ったようにゆらりゆらりと横に動いている。車酔いをした事はないのにおかしいなと一瞬不思議な感覚にとらわれた。

直後、ラジオから地震のニュースが流れた。東北地方で大きな地震があったとのこと、その時は直下型ではなくあまり被害もないのかなとあまり気に留めてなかった。

1時間くらいが経過して急いで事務所に帰ると、テレビの惨状を見て絶句した。後は報道のとおりであるが、深淵に迫る恐怖感と涙しか感じ得なかった。

被害状況が明らかになるにつれてその甚大さに声を失った。

法人として我々にできる役割は何でもやらなければならない。とにかくやらないといけないと考えた。

我々にできることはなにか。とりあえず現地に行くこと。募金をすることでの後方支援の二つはやらなければならない。

地震に関しては、個人的にこの16年間積み残してきた思いがあった。平成7年1月17日阪神大震災の時、ちょうどその4月から入所施設を建設、立ち上げ準備で動けなかった事に悔いが残っている。同じ関西にいながら何もできなかった事に対して、今回は必ずやらなければならないとしか思い浮かばずなにかやらなければと。

幸いだったのは、ゆめ風基金が以前城東区で避難所調査の活動をしていたので今回は窓口を決めるにも大変便利であったし、いち早く支援活動に乗り出したゆめ風基金のルートがあることで不安も少なく入ることができた。

法人スタッフから希望があり、4月14日の第1次派遣から現在25名の希望者があり(5月18日時点で)10名派遣をした。

林	4月14日～4月21日	大竹	4月14日～4月27日
綱嶋	4月15日～4月18日	荒川	4月29日～5月4日
吉見	4月29日～5月4日	中島	4月29日～5月7日
靱田	4月29日～5月7日	富吉	5月11日～5月19日
白石	5月16日～5月23日	山崎	5月21日～5月28日
中西	5月24日～5月31日	田島	5月28日～6月4日
永野	6月1日～6月8日	小出	6月15日～6月23日

以下、順次派遣する予定。

六田、栗田、中程、高橋、市川、山川、橋本、真頼、北端、飯田、原口、近藤、国本

あまりにも大きすぎる被害状況で何ができるのかは分からないが、必要であれば長期の支援体制を考慮して、被災された方々に少しでも笑顔が戻る事を願って続けていきたい。

今回は、現地からの報告を中心に(派遣順)被害の状況と障害者支援の実際をスタッフの目で見たま感じたまお届けいたします。

また、被災地障害者センターみやぎ(CILたすけっと)を基点に活動しているので概要を最後に紹介します。



H23.05.11

林 直輝

4/15 (金)

バスにて仙台入り。街並み、行き交う人たちが至って日常という風で驚く。まずは CIL たすけっとの事務所へ。スタッフ 10 名、ボランティア 10 名程度。1 時間ほど活動内容を聞く。避難所を回り障害のある人たちを探し、そのニーズを確認してくるというのがおおまかな内容。

4/15 現在で宮城県北部(女川・南三陸・気仙沼)にはまだ調査に入っていないとのこと。林、大竹には女川に行くよう指示。仙台から女川までは車で 2 時間ほど。石巻市に入ると道端に泥やゴミ、閉店している店が目立ち始め、徐々に倒壊した家屋が目につくようになる。女川に入ると目に入ってくる世界が変わる。辺り一面ガレキが広がっている。何か映画の世界にきたような感覚で現実感がない。

しかしそれでも道路のガレキは端のほうにのけてあり、車が通れる状態になっている。それだけで奇跡的だと感じる。車から出ると潮の匂いに泥や材木、その他色んなものが混じった独特の匂いが鼻につく。まずは対策本部のある女川第二小学校に向かい話を聞く。役場も社協も津波で流され機能していない、障害者はここにはいないとのこと。その近くの総合体育館でも同様、町立病院が福祉避難所になっているのでそこにいるのではないかというので町立病院へ。しかし町立病院でも高齢者はいるけど障害者はいないという返答。話の聞き方、話をする人を選ばないと情報は何も出てこない気がする。

4/16 (土)

この日はたすけっとならスタッフと、わっぱの会からのボランティア 2 名と一緒に女川へ。昨日はあまり話も聞き出せなかったのもう一度第二小学校へ。対策本部は昨日同様だったがボランティアセンターに社協の人がいるとのことボランティアセンターにて話を聞く。資料もすべて流されたので正確な数ではないが、避難所生活をしている人は当初の 5,100 人から 1,900 人に減ってきている。

三障害の手帳交付者は約 600 名で、そのうち福祉サービスを利用していたのは 50 名ほど、そのほとんどが家事援助だったため避難所にいる間ニーズはでないとのこと。女川は TV でよく取り上げられたため物資は足りている。自衛隊も多数入っており入浴場もある。小さな地域だからこそ充足している面もあると話していた。

一方でメディアに取り上げられていない地域ではほとんど手付かずの地域もあるとのこと。続いて昨日と同じく総合体育館へ。保健師から話を聞く。昨日障害者はいないと聞いたと伝えると「そんなことはない、精神の人が何人もいる」と第一声。

話を聞く人によっては車椅子を使っている人、視覚障害を持っている人というぱっと見

てわかる人でないと障害者とは捉えていないのかもしれない。女川には福祉サービスが少ないので石巻市に避難している人のほうが多いのではないかということ。石巻市ではこだまホスピタルが精神の人の受け皿に、祥心会が知的の人の受け皿になっているとのこと。女川の福祉資源は全て流されたとのこと。

4/17（日）

調査には出ず、たすけっと事務所に詰める。北の方は移動に時間がかかりすぎ、活動時間に制限が出てくるので新たな拠点の為の物件探しを行う。被災地の人の仮住まい等で賃貸物件がほとんど無い状態。残っている物件を見ると北の拠点は登米市になりそう。

福祉資源の数や利用状況、家族の捉え方、全て大阪と異なっている。ゆめ風基金の八幡さんは地方の福祉のあり様を変える機会になると考えている様子。

4/18（月）

総合体育館にて無呼吸症候群の治療に使う機器の輸送は可能か？無理なら通院は可能か？という問い合わせがある。顔をあわせた人には認知してもらえているよう。事務所に確認したところ機器の輸送は無理だが通院は可能とのこと。また、被災地障害者センターみやぎの活動については保健師の会議で周知してくれるとのこと。

次に女川勤労青少年センターへ。ここは総合体育館等より規模が小さくなるためか、活動の趣旨を説明すると個人名まで教えてくれた。本人は不在だったが知的の方が2名（家族と同居）、精神と思われる方が1名（単身）いるとのこと。また直接話しを聞きに来る必要あり。

女川原発にも避難所があるという事で足を伸ばしてみたがセキュリティーの関係上門前払い。

帰り道、1時間前は普通に通れた道路が海水で冠水している。深さは30cmほどか。この日はちょうど大潮で満潮まであと1時間ということもあり潮位がかなりあがっていた。女川での活動は満潮時間の1時間半前までで区切りをつけたほうが良い。何という事のない深さだが、海面が地面に乗り上げ、通常ではありえない景色でとても怖い。場所によっては潮が満ちる事で下水が溢れている箇所も。

4/19（火）

女川勤労青少年センターへ。今日は母親に話を聞くことができた。本人は知的 26歳男性。社会福祉法人えいらく会の補助職員として働いているとのこと。状態としては落ち着いてきている。人懐っこく周囲の人に可愛がられているとのこと。しかし小さな余震でも恐怖でパニックを起こすこともあるという。避難してから風邪が治りきらず今まで来ている、入浴もまだ一回しかできていない。取り急ぎのニーズとしては入浴介助、髭そりがうまくできないので電気シェーバーが欲しいとのこと。また、女川には親の会があり、女川

高校にいるであろう方、2名の名前を確認。ただ携帯を持っていないので親の会の他の人が今どうしているかはわからないとのこと。親の会の人に連絡をとれば一気に仕事が出てきそうな気配。

今日は昨日の反省から満潮時間よりだいぶ早めに切り上げる。災害支援の車両、自衛隊の車両等で道路の渋滞がどうしても読めない。

4/20 (水)

女川へ向かっている途中、海泉閣という避難所(旅館)に向かって欲しいと事務所より連絡。女川社協から連絡があったとのこと。早速現地に向かい、保健係に話を聞く。依頼があった男性(Kさん)を含め身体の方が2名、精神の方が1名いるとのこと。物資についてはおむつのL~LLサイズが全くないとのこと、翌日届けると伝える。Kさんは別館にいるとのこと、別館の玄関口には先ほど話しに出てきた精神の方が寝ており、「ここは俺の家や!」と声を出しているが誰も気にしていない。むしろあの人はこのボスよ、という風でなじんでいる。Kさんに話を聞くと民生委員から被災地障害者センターのことを聞いて依頼をしたとのこと。手足が動きにくく、布団からでは起き上がりがしんどいので簡易なものでよいからベッドが欲しい、また排泄の際にお尻を拭くことはできるが時間がかかるのでウォシュレットが欲しいとのこと。避難してすぐの頃だったら言い出せなかったが、人も減ってきた今だからお願いしてみようという気になったとのこと。

海泉閣を後にして、昨日勤労センターで聞いた女川高校に行くと、避難所の統廃合により、女川高校の避難所は第一小学校に統合されたとのことなので第一小学校へ。責任者と話をする。勤労センターで名前が出た人はいなかったが、療育手帳所持者が2名いるとのことでわざわざ連れてきてくれる。1名は55歳男性、困っている事は無いとニコニコしながら話してくれる。もう1名はダウン症の女の子(小学校4年生)。母親から話を聞く。急ぎで欲しいものはトイレにいくと下着を汚してしまうので換えの下着が数枚欲しい、同年代の子どもたちと遊べたら良いがなかなか輪の中に入れてもらえないので思いっきり遊べる場所・時間が欲しいというニーズ。母親も学校が始まったので楽になったが、それまではストレスがたまっていたとのこと。家族がレスパイトできる場所も必要。

ようやく個人に結びついてきた。

4/21 (木)

昨日要望のあった下着を届けに第二小学校へ。その後海泉閣のトイレにウォシュレットを設置できるかどうかの確認。許可がおりるか責任者に確認したかったが不在。勤労青少年センターに行き、入浴介助の打ち合わせ。この日は風邪気味との事で本人と初めて顔をあわせることができた。優しい感じで、愛情を注いでもらったであろうことが伝わってくる人柄。話も好きなようで林、大竹にもよく話しかけてくる。やはり入浴は嬉しいようでとても喜んでいる。次の日曜日に入浴介助に入ることでまとまる。次回以降の入浴のペー

スは要調整。私の派遣予定が今日までとなっており、あの笑顔に直接応える事ができないと思うと申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

---

たすけっこのスタッフは人柄もよく、活動に尽力しているのが伝わってきた。事務所の雰囲気もアットホームで好感がもてた。しかし活動が始まってまだ一カ月ということもあってかほぼ同じ内容を数回ミーティングする等時間がもったいないと感じる場面も見受けられた。情報を統括する人と、外部との調整をする人、指示系統が確立されれば効率はもっと上がるものと思われる。しかしやはりボランティアの人数がまだまだ絶対的に足りていない。

個人的には一週間という期間は短く、二週間だと長いと感じている。女川については自分たちが初めに調査に入り、個人に繋がり始めたところで帰阪という流れなので非常にモヤモヤしたものがある。大竹が流れは把握しているので、うまく次の人に引き継いでくれたと思うが、ニーズを聞き出したはいいものの、自分がそれに応えることなく帰ってしまうのはとても心苦しかった。

実際に現地に行って感じた事は、第一に実際に自分の目で見る事、耳で聞くことが必要だということ。TVやネットで見るとはやはりどこか現実のものではないのだと感じた。TVで見えていたら、ここは被害が少なかったのだろうと流してしまうような景色も実際に目の当たりにするとショックが大きい。当然のことながら、被災した人の話は重くのしかかってくる。しかしそれでも自分の目で見る事を強く推奨する。感じるものは人によって様々だろうが何かしら感じる事があるはずである。



## 東日本大震災ボランティア（宮城県）

大竹 寛輝

### ・活動記録

4月15日～4月27日の間で活動。初日から現地に入り避難所や市役所、町役場での調査活動を行なった。大竹、林はまだ調査に入れていない女川町での活動がメインで期間の活動のほとんどが女川町であった。

ボランティア時の町の状態としては、女川町は壊滅状態で町役場、女川町社会福祉協議会の通常の機能はストップしていて、町役場は罹災証明の発行と自動車の廃棄手続き、社協はボランティアセンターの調整などで追われていた。

ライフラインについては、水道は、一部湧水などで変わらないところもあったがほとんどが給水車で対応している。電気は避難所によって通っているところ通っていない所があったが、日を追うごとに電気会社が入り電線などの工事を行ない復旧しつつある状況だった。ガスはプロパンがほとんどだが、ガス台自体がないので炭を燃やしたり簡易のガスコンロなどを使用したりしていた。

また自衛隊の拠点があり瓦礫の撤去や整地などの作業によって滞在期間中で風景は日々変化しつつあった。

避難所で生活している障がい者と繋がろうとしたのだが、聞く人によって情報は曖昧であった。避難所の管理者によると福祉避難所にいるといった情報だったので実際避難所へ行ってみると、元は女川町立病院の老健施設が福祉避難所になってはいたが障がい者に出会うことはできなかった。

避難所に戻り地元の保健師、民生委員、児童委員など地域を知っている方に聞くと何名かの障がい者の方と繋がりニーズを聞く事ができた。そこでニーズとして上がったのは介護用オムツやベッド、衣料品などの物質的なものが多く挙げられた。しかし、その中には避難所の仮設風呂での入浴介助や親御さんのレスパイト的な日中活動の場などが挙げられた。

入浴介助では軽度の知的障害のある男性でいつもはお母さんが全て洗っていたが、仮設風呂は男女別なので代わりに見てくれないかということだった。

結果的にその方はほとんど自分でできるので仕上げをヘルパーが関わるという形で週2回程度の入浴介助を行った。

次に片麻痺のある男性で仮設のお風呂に入ろうにも浴槽が腰くらいの高さまであり、介助なしでは入浴不可能であった。自衛隊の方と話す中で手伝うことは可能だが全てを任せられるのは責任がとれないとのことだった。その後この方は地元の被災していないデイサービスを利用して週2回の入浴が可能になった。

日中活動の場では、小学校4年生のダウン症のお子さんがおられる親御さんが「今は学

校も始まり楽にはなったが、始まる前はずっと付きっきりでストレスも溜まり厳しく叱ってしてしまうこともあった」と言われ、「日中だけでも預かってもらえるところがあればよかった。今は運動場が使えないのでこの子が遊べる場所はないか」という声が出た。

こういったニーズにたいして現地のボランティアだけでなく長期的な支援を行なえる横との繋がりや、そういった社会資源を作っていくことも視野に入れていくことが必要ではないかと感じた。

現地では様々な情報が錯綜していて聞いただけの情報では当てにならないので頻繁に通い自分の目で確認する事とその地域をよく知っている方と繋がる必要があると思う。

しかし在宅に帰られた障がい者の方を把握するのは難しく、チラシが手に届くよう調整し後は連絡を待つという形しかできなかった。結果的に予想以上に障がい者の方は町内の避難所におられず内陸部にある社会福祉施設に避難されている方が多いとの事だった。

ボランティア活動を通して感じた事は、困った時にどれだけ助けてくれる人が周りにいて、困ったということ伝えられる人がいるかということである。良くも悪くも障がい者の方たちは一定の社会福祉施設などから囲われているという事が多いと思う。しかし今回のような津波によって施設自体が無くなり普段と全く違う状況に陥った際、様々な所に頼れる誰かを作っていく必要があると思う。そう感じたのはボランティアに行ってもなかなか当事者の方と繋がるのに時間がかかったり繋がれなかったり、住民の人たちにも聞き出す事は難しかったからである。繋がりがある事が自分の身を守り、非常時だからこそ人と人との繋がりが大切な事ではないかと感じた。これは障がい者の方だけでなく自分自身にも照らし合わせながら普段の生活を意識しなければならないと感じた。



平成 23 年 4 月 29 日

綱嶋尚至

日 程：平成 23 年 4 月 15 日（木）～18 日（月）

行き先：宮城県南三陸町志津川町

自分の見たこと、感じたことを伝えないといけないと思いながらもその気持ちをうまく文章にまとめることが難しく感じて、仕事にかまかけてずるずると 2 週間も過ぎてしまいました。

南三陸町までは交通機関を利用した。福島までは新幹線で。福島～仙台は新幹線が不通で鈍行列車にて。東京から東に進むと車窓からみえる屋根の一部にちらほらとブルーシートがみえてきた。もうこの辺りから震災の影響がでていた。

仙台駅やその周囲のビルもシートで覆いがしてあり、重機が入っているのを見るときいよ被災地に近づいていることを身近に感じてきたものの、町全体の雰囲気は落ち着いているように感じた。少し拍子抜け。

そこから高速バスで登米市にでる。この辺りで津波に洗われたと思われる家電製品の小山が所々でみられ、塀の崩れもあった。さらに市営バスで 1 時間揺られ最終バス停の滝ノ沢で下車。ここに長期ボランティア T さんが車で迎えに来てくださった。ここまではテレビで見ると悲慘な光景はなく、どこが被災地なのかわからず全く実感がわかなかった。少し暑かったので窓を開けようとするとう埃がひどいからとマスクを渡された。

そこから南三陸町で一番大きな避難所であるベイサイドアリーナまでの 20 分弱の道のは何ともいえないものだった。言葉がありません。泣きそうになった。本当に何もなく、神戸に例えればこの辺りが三宮と言われても、瓦礫しかありません。何もないのでただっ広い平野がわりと遠くまで見渡せた。

T さんが志津川高校のボランティアリーダーをされていると聞いていたので、自分の拠点もそこに置くと思っていたら、町で一番大きな避難所であるベイサイドアリーナに到着した。各避難所は外部の人の侵入は警戒されるとのことで、ボランティアは皆アリーナ近辺でマイカー内で寝たり、テントを張っていた。T さんは長期ボラということで交渉してアリーナ内のホール 2 階観客席通路にシートを敷いて自分のスペースを作っていた。そこで早 1 ヶ月を過ごされていることにまず驚かされました。周囲にも町の被災者や他のボランティアもおられた。食事は被災者用の炊き出しを分けてもらった。私が到着した日によりやく電気がついたが、他の不通の避難所のことを考慮して従来どおり 20:30 に消灯。

それまでは 18:30～20:30 までの 2 時間のみ発電機にて発電されていたとのこと。それ以外のライフラインは不通。高台にあるので被害をうけていない周囲の民家からも水をボトルに入れて持ち帰る姿が見られた。自衛隊が用意した水は飲料用のみなので、至るところに消毒用スプレーが設置されていた。簡易トイレはプライバシーもへったくれ

もないようなものだが、皆黙って使われていた。アリーナの廊下にはダンボールで仕切ったスペースで避難家族が過ごされていた。そこにできた狭い通路を通してホールに入るが、疲れた顔をされていても皆きちんと挨拶を返していただいた。中でも外でもそうだった。アリーナ自体も外壁の一部が剥がれていた。余震があっても誰も騒がなかった。ホールにはたくさんの救援物資が整然と整理されているが、棺や骨壺もその一つだった。私がいた短期間の間でも、確実に毎日棺が減っていた。死がとても身近だった。骨壺はホールの外に箱に入ったものが雑然と積んであるし。その余裕のなさに改めて大変さを感じた。消防やパトカー、救急車がいつも目の前にあるのでそれが当たり前の光景になる。

ボランティアは9：00に町の社協が運営するボランティアセンターで行き先を申告して出発。少し時間があつたので歩いて沿岸部を散歩しました。海がとてもきれいで穏やかなのに、町には土台しかのこってない。そのギャップが何とも言えずに自然と涙が出てきます。地震の前は綺麗な町並みだったのだろう。高台に上るにつれて、被災が軽くなっていく。その差は紙一重なのに、受ける事実の差は大きすぎる。アパートの上層階の壊れた窓から中が少しみえるが、それでもそんなところまで津波が襲ってきたことが想像できない。

志津川高校では送られてくる物資の仕分け作業や搬出入をした。自衛隊が常駐しておりその働きに感服。他のボランティアも全国からきており、わりと多くが1ヶ月の長期滞在者。そこに週末を利用しての方や地元の学生が加わる。多種多様な物資の仕分けは意外と手間で、きりのない仕事だった。もうあたたかくなってきているのに、まだ冬服の物資が新たに届くなど、なかなかニーズが合致しないところもみられた。志津川高校をベース基地としてさらに10箇所ほどの避難所があるが、そこまでボランティアの手は回っておらず、これからTさんが手配していく状況だった。避難所の責任者との仲介役、日替わりで来るボランティアへの指示と、なかなか大変そう。せつかく来てくれたボランティアに仕事を回すこともそのひとつ。果たしてTさんは帰ってこれるのだろうか心配。ただやはりそのパーソナリティーゆえ、個性的なボランティアを上手にまとめていた。

被災者と向き合えるか？未熟な私の戸惑いだった。荷物の仕分けをしていれば働いている気にはなるが、でもそんなことだけするためにきたわけではない。人と出会いたい。でも避難所の扉を自ら進んであける勇気はなかった。かける言葉もみつからない。途方にくれていると向こうから声をかけてくれました。大阪から来たことをねぎらってくれる。でもその人の息子夫婦はまだみつかっていないとさりりと言われる。死や悲しみと向き合えない、Tさんの言葉を借りれば自分だけ悲しみに暮れているわけには行かない、皆つらいのをがまんしているんだから、そんな感じだった。だから、そうしたケアが必要になるのはもうしばらく後かな、と思う。そのときは一気にどっとくるのかな。日向ぼっこをしているおじさんの横に座らせてもらう。命からがらなんとか逃げてこられたらいい。この震災で感謝することを学んだといわれる。こんな状況にあつてもそうとらえることができる

人間のすばらしさに感嘆する。

志津川高校のグラウンドのネットには、大きな布にかかれた‘感謝’という言葉がかけられている。

たった4日間でしたが、やはり行って良かった。行かねばわからなかった。行かないとダメだった。帰阪してからしばらくはライフラインの完備された平和な環境に少しの戸惑いを感じたますが、もう慣れた。それが当たり前に戻った。でも新聞を開けば南三陸町の記事にはすぐに目が行く。この先自分はこの経験をどう生かしていくのか。自分自身に問いながら、生きようと思う。

以上



4月29日朝8時ごろ約12時間かけて仙台へ到着。東北道から被災地障害者センターみやぎ（CIL たすけっと）までの道のりは震災の様子は全く見受けられない平穏な街並みであった。

既に派遣していたスタッフ（綱島・林・大竹）の報告を受けるも被災地障害者センターみやぎの活動やそれに伴う全体像が分からないので、実際行ってみないと状況の把握ができないということで行ってきた。

たすけっと到着後は前夜からの長距離運転のためゆっくり過ごし、事務局の菊池さんの説明を受ける。

午後は、海側（若林区）を回りさらに施設を2か所訪問した。

30日から5月2日までは北部の南三陸町で何らかのきっかけをつかむために避難所訪問を行った。

仙台から南三陸まで高速で約2時間かかる距離であるがその間の海側は同じような被害状況であり、全体でいえば岩手から福島までの沿岸部の長さを考えるとその被害の甚大さに言葉を失うという状況であった。

全体的に地震というよりは、津波の被害の大きさが印象的であった。

## 1. 活動内容

宮城県においても大阪市の障害福祉サービスと同じ状況が展開されていると思っていたが全く地域事情によって異なる事を実感した。むしろ大阪市等が特別の地域かもしれない。

自立生活運動はまだまだ一部だし、知的障害関係に至っては大きな法人が入所施設を運営しており、その傘下で日中活動が展開されている（特に仙台を離れた郡部においては顕著である）郡部においては移動支援さえも存在していないという現実がある。精神障害者についても情報は得られなかった。

そのような環境の中で避難所を回り、障害故に困っている人はいないですかと聞き取りして回るのだが障害者はいないという返事が返ってくるだけであった。

南三陸町の仮設の役場では、地域を大きな社会福祉法人が取りまとめているし、一方ではJDF等大きな団体も活動しているので特に必要ないとのことであった。

## 2. 南三陸町の状況

### \*被災状況

海沿いの町で山手側から沿岸部に入ると突然崩壊したガレキが眼に飛び込んでくる。とにかく完全に崩壊しているか、津波が届かなかった家はそのまま残っており、ゼロか百の感じで壊れかけた家はほとんど見られないという極端な様相を示しており、言葉を失う惨

状であった。

津波が飲み込んだ範囲は、海岸部に面した一番多く住民が生活しているところは何もないという状況である。

ライフラインについては、電気が時間制限はありながらも復旧しつつあるが水道が壊滅しており、復旧にかなり時間がかかるだろうとのことであった。

ガスについては、プロパンガスである。

3日間通ったが、3日間だけでもガレキ撤去など日々復旧への勢いは感じた。天気の良い時は埃がものすごく舞い上がっていた。海をみると本当に穏やかなきれいな海で牙をむいた事などなかったかのような印象であった。

### 3. 避難所の状況

高台に位置しているベイサイドアリーナ（スポーツセンター）が拠点となり役場の仮設も敷地内に設置されており、次の拠点となる避難所が5か所、更に約40か所の避難所が設置されている。物資の補給もこの流れに沿って分配されていた。たまたま一つの拠点である志津川高校のボランティアリーダーと先行してボランティア活動に行ったスタッフ（綱嶋）とが知り合いだったのでこの方から様々な情報を得ることができたが、長期のボランティアがいないので短期のボランティアはたくさん来るもののコントロールできる人がいないというのが大きな悩みであった。更に小さな避難所については毛細血管までには物資も行き届いていないという訴えであった。

また、ベイサイドアリーナにボランティアの受付があったが全国の社協の職員が応援に来ているために適切なボランティアの配置なども問題があるとの事だった。

またこのボランティアリーダーの方を通じて下記のキーパーソンと出会うことができた。

避難所を見たときの大きな問題点は、トイレの問題である。水がないのでトイレに関してはかなり衛生状態が悪かったし、臭いもかなりしていた。

現在は、仮設住宅の建設も始まり避難所も背いる統合される時期になっているので日々情報が変わってくる段階で仮設住宅へ引っ越したあとの対策も求められる時期であった。

### 4. 障害福祉の状況

町内に障害手帳を所持している方が約1,000人と聞いたが、役場での正確な数字を聞いていないので実態は不明だが身体障害者や精神障害者についてはほとんど実態把握がなされていないように感じた。障害福祉サービスの在宅部分については居宅介護や移動支援は全く存在していなかった。

知的障害者については、唯一のぞみ福祉作業所があり、22年3月までは町の社会福祉協議会の運営であったが22年4月から気仙沼にある社会福祉法人洗心会の運営に変わったとのことであった。現在17名の利用者と生活介護事業所として活動していた。ここの親の会の取りまとめをしているようなSさんという親御さんとの出会いによって取っ掛かり

が全くなかったところから大きく展開が変わってきた。短期間ではあったが同じ場所へ通う事で日々情報が変わるし、関係が作れる事で情報がもらえるようになった。

#### 5. 被災障害者センターみやぎ

〒982-0011 仙台市太白区长町1-6-1

CIL たすけっと気付

TEL 022-746-8012 fax 022-248-6016

母体は、自立生活センターたすけっとが中心となって動き、ゆめ風基金の全面的な応援で活動している。行くまでは当然仙台市から委託相談支援事業を委託されて活動しているものと思っていたが、居宅介護だけで運営している規模の小さい団体であったのには驚きであった。

現在、ゆめ風基金との連携で極端に言えば宮城県の海沿いの被災地を北から南までのすべてを網羅しているのが現在であるがたすけっとのスタッフの力量を超えての対応が求められており、たすけっとのスタッフが休みもなく動いている努力は限界を超えたものがあり継続的な支援をしていかなければたすけっとの負担は大きすぎると感じた。



平成23年5月6日

吉見 あづさ

ゆめかぜ基金のボランティアとして被災地に入る。仙台市のC I Lたすけっとが最初の拠点となって、各地の障害者の被災状況を調査し、一人一人の障害者と出会い、具体的な支援を行っている。

4月29日 この日は朝に到着したため、仙台市近辺の調査に出向く。

最初の提案としてはすでに林と大竹が先に活動していたため、その結果から避難所に障害者がいないことを把握していたので、施設に避難しているであろうことを想定して、施設に状況を聞きに行く提案をした。

そこで仙台市青葉区の重症心身障害者施設つどいの家コペルに行く。

情報一・名取市にあったルバートはすべて流され、町中で知り合いの所を借りて日中活動を再開したが、とても困っているらしい。

- ・まどかあらはまさんも流されワークキャンパス（SEL P）で場所を借りて、日中活動を開始。

- ・知的障害者は育成会、重身はつどいの家、自閉症はみずきの里が仙台市は中心になって、被災状況を確認できているはずとのこと。

- ・各施設で障害者を受け入れているが、その際の送迎の手が足りないこと。法人内でやりくりはしているが、足りないのも現状。

- ・利用者の一家族が仮設住宅入居を希望しているが、障害がある子どもを入れてもらうのも、バリアフリーの住居を希望するのも心苦しいが、そういう住居の提供があればどうしたらいいかの情報が欲しいとのこと。

ワークキャンパスにての情報（仙台市太白区）

J D Fが全て把握しており、物資も十分にあり何も困っていることはない。

J D Fの活動で被災状況は確認できているとの話であった。

一日目の時点で施設の資源の地域性を目の当たりにする。大きな法人が地域の資源をほとんど持っていて、その団体は全国的な組織にも属している。そこでよそから状況を確認しようにも、法人で完結出来ているという回答しか返ってこない状況があった。

それでも資源を利用できていない隠れた障害者は必ずいるわけで、その人たちが今どのようにしているのか、それを確認できるすべはないか、そのことを知る手立ては、行政も機能していない中では避難所に何度も足を運び、障害のある人の情報を集めてくるし

かないことに納得させられる。地道なビラ配りからも、表に出てこない人のつながりを生む現状。早くも大きな法人（JDFなど・・・）の壁に頭打ちという感じである。

4月30日 南三陸に入る。この時には三陸自動車道も開通していたので、仙台市から車で2時間で到着。

あらかじめ早くに調査に来ていた「たすけっと」からの情報は、ここも、もともと気仙沼にある大きな法人（洗心会）が障害者作業所を一つ運営していて、すべて事足りているということ、行政側の人も多くが被災しており、残った人たちと法人が連携しているので、よそからの支援は必要ないと言われているとのことであった。

その中でも唯一の障害者作業所のぞみ福祉作業所が少し離れた場所で活動を再開しつつあること。

障害者手帳は約1000人発行。データはすべて流れている。居宅介護、移動支援利用者は0人。

ここでも避難所に入れず、被災している障害者がいるはず。

JDF（法人）と行政が全てを把握しているというが・・・。

こうした中で情報収集にかかる。保健師が留守で会えず。翌日にアポを取る。

綱嶋の知り合いTさんと連絡を取って志津川高校に行く。

Tさんは早くから南三陸にボランティアに入って活動。

- ・ボランティアをコーディネートする人がいない。
- ・社協の人も多くが亡くなり、今は全国から交代で来ているため、ボランティアをコーディネートできるような人材はいない。
- ・物資は十分であるが、生きてるだけで精一杯。
- ・一番大きな避難所のベイサイドアリーナで寝ているが、そこで地元の人と出会い、子ども障害者で親類の家に預け、自分はここで寝ているという父親の話聞く。(Sさん) いずれは南三陸で作業所を復活させたいと話していたことを聞く。
- ・南三陸だけで、44か所の避難所があり、中心がベイサイドアリーナで、6か所の中核的避難所がある。そこでは障害のある人の姿は見ないとのことであった。

障害のある人はどこに行った？ 施設や親類宅？

5月1日 保健師さんと電話連絡する。すでにJDFと洗心会と社協で連携して相談支援を行っているから、よその団体の支援はいらないと言われる。

他の避難所に回るが、障害のある人の姿はなし。

Tさんの所に再度行く。今後のゆめ風の地域を作る活動の相談も含め、昨日話に出た人が地域の拠点作りに関与できないかの話をする、すぐに連絡を取ってくれる。明日に会える段取りをする。

5月2日 Sさんと会う。

- ・のぞみ福祉作業所は去年の4月まで社協が運営していたが、町では経営できなくなり、引き継いだのが社会福祉法人洗心会だった。運営も安定して、親としても安心していたところであった。(利用者16名)
- ・ちょうど福祉資源を利用していない障害者の調査をしようという話が出ていた時にこの震災で、他の障害者については把握できていない。
- ・Sさんは親として、おもちゃ図書館の活動にも昔から参加しており、被災しながらもボランティアとして避難所で活動されている。
- ・のぞみ福祉作業所の活動も入谷というところで場所だけは法人が確保してくれているが、実際はこの日、親子での花見を実施し、久しぶりにみんなが会っている段階であるとのこと。

この日の話では、団体や法人、行政の垣根を越えて、地域の人々の支援拠点を作ることには前向きな話ができ、Sさんという親と出会うことができたことは障害者の被災状況を把握する上でとてもありがたかった。

そしてSさんから具体的に避難所のお風呂に入れなくて困っている人がいるとのこと。お宅に伺う。家は高台にあったため、無事。そこで親子さんと話していると家にずっといて、ストレスがたまっている話や、祖父母が特別支援学校に行っている子どもを見ていて、きっと疲れているだろうという話が出てくる。

車で入浴に行き、一緒に入れることや、ドライブに行くことなども可能であることを伝える。

このようにして直接、障害のある人との出会いがあつて初めて、隠された課題がたくさんあることが実感できた。

5月3日 具体的な活動に入る。

0くん 入浴。 Sさん、0さんから聞いた他の人の状況確認。

～大震災の現場から感じたこと～

人は日常から引き裂かれるほどの大きな出来事に遭遇した時、何が現実で現実でないかわからない精神の状態に置かれるのであろう。それは直接その出来事に遭遇したのではなくても、今回の震災跡（それでもかなりがれきも片付いた跡）を見るだけで同じ感覚に陥るほどであった。ならば直接この震災を体験し、津波で全てを失くし、全てが無

なくなった町を見ている被災した人たちの心は、どうすれば回復できるのか、手立てはあるのか、途方にくれる。

日常性の断絶から回復するための個々人の立て直しと、社会の立て直しの二つの側面にどんな「支援」が存在するのかを考えさせられる。

今回は、ゆめ風基金のボランティアとして障害のある人の支援にあたる。現地調査の結果、特に知的障害のある人は避難所にはいないというか入れない。そのため家にいる人は自宅か親戚の家に本人だけを預けるか、一旦施設に預けるかしている様子があった。中には自閉症の子どものいる家庭が避難所において、うるさいことを理由に別室に行くように言われ、周りとう孤立してしまっている状況もあった。しかし、こうして見える障害者はまだ支援の手立てがあるが、地域の特性から、見えない障害者が多い。

もともと障害福祉サービス利用者が少ないのである。南三陸にあたっては、知的障害者の移動支援利用、居宅介護利用とも0人、作業所は一つだけで17名の利用のみで、精神の障害サービスとも大きな法人1箇所が全てを担っている。情報としては1000人の障害手帳交付があったそうだが、こうしたことからいかに障害サービスを受けている人が少ないかがわかる。そして今回は行政機能も全て流され、書類も残されていない状況の中で、要援護者リストどころか、特別な支援を必要とする人たちが完全に見えなくなってしまっていた。また大きな法人1箇所が力を持ってしまっているのも、支援が完結してしまっているかのような動きになる。

そうした現状から今「個々」に必要なこと、これからの「個々」「地域」のために必要なことは、地域の人とつながって、困っている人がいないかを丁寧に拾い上げていき、支援につなげていく。そして今後の地域を、地域の人達の手で作ることのできるバックアップをしていくことが必要である。こういう時はせめて運動団体や障害種別の枠を超えて連携して欲しいと強く思う。(現状は腹立たしいほどに連携ができない。悲しい程)

私たちが生活している所でしなければならないことは、障害のある人や高齢者が埋もれてしまわないように、福祉避難所の設置は急務である。また要援護者リストの作成と災害時のリスト開示方法を地域の中で確立していくことは必須であることを認識できた。

普段から垣根をなくした地域を作っておくことが障害のある人もない人も救うことになる。地域を守ることになる。

日常性の断絶から回復するために、地域を作り、一人一人の世界が崩れないように支えていくこと・・・それしか今は考えられない。

## 東北震災ボランティア：仙台で活動

中島 伸治

活動拠点：仙台市太白区長町 1-6-1 CIL たすけっと内

名称：被災地障害センターみやぎ

被災状況：海岸線から数キロの内陸まで被災されている、田畑は全滅になっている。一線を越えると津波被害が無いところは普段どおりの、生活をされている、一部建物には入れない物件もあり、道路は陥没している。

4月29日 8時30分着

活動開始：昼から

つどいの家コペルに出向き、被災状況などを聞く

※ まどか荒浜作業所が全倒壊し活動は、仙台ワークキャンパスにて仮活動をしているが、仕事が無い状態（ワークキャンパスが仕事を回している）。

※ ルバートは津波に流され、市内のどこかで活動している。

身体・知的・精神3障害を個々の団体が見ているから、そのために全体の把握が出来ていない。

4月30日

亘理町方面

逢隈小学校体育館（避難所）

逢隈小・中に荒浜小・中が間借しながら授業を再開している、逢隈中学校の体育館を4校が交代で使っている。

避難所のリーダーIさんが、これからいろんな要望が出てくるでしょうと話される

避難所の中では受付所・女性用更衣室を島根の方が無償で作ってくれていました。避難所内での仕切になっているダンボールの高さが1.5m程度あった。

亘理町役場にて都市建設開発課にて仮設住宅について問い合わせる。場所：亘理町蚕業試験場本部跡地、戸数：116戸

バリアフリー：戸口までスロープ、屋内はフラットのみ、入居後要望があれば対応する（出来る範囲）、昨日説明会あり、本日から入居始まる。

岩沼市市役所社会福祉課へ問い合わせ：仮設住宅5月中に入居予定、場所高校、戸数：102戸、その他：コミュニティー毎に仮設住宅に入居してもらう。

5月1日：角田市の避難所へ状況を見に行く

農村環境改善センター

避難者：27名、高齢者が多く、18歳の方が一番若い

※ 以前に来た人と違うねと聞かれる、

※ 今のところのところ問題ない、今後のつながりが必要、通院などに必要があれば連絡くださいと伝える。

丸森町

2箇所避難所を回るが閉鎖されていた

筆甫中校（避難所）福島県南相馬より避難されている。

役所の方は話を保健士の方に回され、保健士の方と話をする、障害の方はいませんと話される。

5月2日～5月6日：南三陸志津川町で活動する

荒川・吉見が繋げてきていることを切らすことなくそして次へつなげるように活動してきた。

3日ノーマライゼーション協会から来られているKさんと同行する

支援をしている母体「洗心会」はJDFの支援を受けているので、

「被災者障害センターみやぎ」と協力して支援して欲しいと要望があり13日会合を持つ予定。

その後、SさんよりAさんを紹介してもらう

活動内容：3家族、3人の障害（児）者の支援をしてきた。

●Oさん20歳、（男）

障害内容：ダウン症、名刺の名前（ふりがな）を読む事が好き

家で避難されている、

支援希望内容：入浴・レスパイト

入浴：3日に自衛隊風呂（避難所ベイト・アリーナに設置）入りに行くが入り口まで行くが入らなかった。同行、母親、Sさん（親の会、繋げて頂いた）、靱田、中島、K（希望に家からのボランティア）

4日レスパイトで道の駅で遊ぶ：仮設風呂の写真を撮る入り口から浴槽まで

5日写真を渡し仮設風呂を知ってもらう

6日仮設風呂には入らなかった、今後温泉に入る事も考えていく

同行：母親・K・N（わっぱの会・つぎへつなげる）

●Aさん14歳（男）

障害内容：自閉症 その他：アトピー

アトピーにより目をこすり角膜剥離になる片方は手術するが片方はできなかった。見えるが遠近がとれない様でコップは手渡しをしている、靴、階段などは足探りをする。

支援希望内容：土曜日午前中レスパイト、将来的には入浴  
5日金曜日に道の駅で遊び関係を作る。

●Hさん 23歳（男）

障害内容：自閉症、新聞は見るが字は読めない（父親より）

被災前は気仙沼線を見るのが楽しみで、よく一人で駅まで出かけていた、ドラッグストア、コンビニなどで自分のおきにいりが必要なものは一人で買い物に出かけられていた。被災後スケジュール化された自分の世界が全て無くなる、それと祖母が亡くなったと思い（無事わかる）それで家に入ったままの状態となる、両親とは出かけている、石巻市のイオンからの支援で映画を両親と見に行かれた。

（ドラえもん）

支援希望内容：レスパイト、入浴

母親に電話して状態を確認しながらレスパイト支援を始めていく

週間予定：月・水・金：Oさん

火・木：Hさんただし事前に電話し状態を確認しつつ進めていく

土：Kさん



期間：平成23年4月29日～5月7日

活動場所：ボランティア本部―仙台市内

亘里町・名取市・岩沼市・丸森町・角田市・山元町・南三陸町・気仙沼市

<亘町・名取市・岩沼市>

津波による被害が大きく、田畑も塩害による大きな被害。平野部なので、避難できる高台が少なく逃げ遅れた人も多い。流されてきた瓦礫は、殆どが手付かずのまま。

・亘町の施設：内陸部にある施設。沿岸部にある施設の情報はある程度は入ってきているが、実態の把握は少し弱い。沿岸部は景観が良いということで、高齢者の入所施設も多いよう。

・逢隈小学校：以前にたすけっとボランティアが訪問し、依頼を受け設置したポータブルトイレを含めたその後の状況などを聞きに行く。Iさんという男性が、統括している避難所。体育館を使用している。小学校を避難所としているところは少なくないが、トイレなど、中が小学生に合わせたサイズになっているので、大人は使いにくいものが多い。

子供がいる避難所は、和やかな雰囲気や癒される場面もあるが、そうでない避難所は殺伐とした雰囲気になりやすいと聞く。

・亘町役場・名取市役所：入居し始めている仮設住宅、間もなく入居、建設中、と箇所によって様々だったが、バリアフリーの仮設住宅は少数。町役場、市役所では入居者に障害者がいるいないの把握はしておらず、実際に入居後の生活が始まり、要請があれば応えていくという。

福祉課、建設課の職員は訪問してくる被災者の対応に追われ、情報に関しての質問に対して「実際に住んでみないと分からないので」と忙しい中、対応してくれた。

・岩沼市：仮設住宅入居者の対応に追われる。「個人情報保護法に触れる」とのことで詳しく聞けず。仮設住宅は100戸ほどの単位で建てられていて、連休中に順次入居が始まっていたが、路地に出てきている人はおらず、静かだった。

※避難所では、状況や要望など生の声が聞きやすい。市になると、対応をしっかりときちりちり行っている雰囲気はあるが、入居者についての情報を事前に把握は出来ていないよう。しかし、なるべく仮設住宅への入居はコミュニティーで入居出来るように配慮し

たいとのこと。

※仮設住宅では、すでに入居しているところでもまだ実際に自治体などが立ち上がって  
いなかったため、詳しく生活に関して聞くことは出来なかった。

○仮設住宅入居後は、なるべく生活に近い状態に近づくが、今後地域の情報や交流など  
がどのように行われていくのか。

○被災して初めて支援が必要になる人、家族は、地域のサービスをうまく利用できるか。

<角田市・丸森町・山元町>

・角田市：避難所2箇所訪問。パーキンソン氏病患者。支援は今のところ要望なし。

・丸森町：山間部のため、津波の影響はなかったが、福島県相馬市と南相馬市からの避難  
者の避難所がある。看護師が常駐し、避難者の健康管理などを行っている。現在は障害者は  
おらず、認知症の高齢者を看護師や家族、周囲の人で支えている。丸森町の役場職員も避  
難当初は訪問したが、その後は全て福島県の方で把握、支援をしているとのこと、ノー  
タッチ。

・山元町：津波の影響で中学校を避難所としている。保健師が他県から1週間交代で派遣、  
常駐。当初は気づかなかった避難者の中に、日が経つにつれ何らかの支援が必要となって  
きている当事者と母親に出会う。たすけつとに繋ぐ。この地域の仮設住宅建設が始まるの  
は、7月から8月頃になるとのこと。

※原発の被災者は一時的な避難ということであるべく近くに、ということであっただろ  
うが、避難所となっている殆ど廃校の中学校は山の中にあり、近くに店などがなく支援物  
資でまかなっている。対応してくれた看護師も本部は仙台市、と聞くと遠慮をしているよ  
うな様子だった。

○地域で支援機関と繋がりを持たず、生活してきた人がどこかに応援を頼みたい、とい  
う思いがなかなか出せない人も沢山いる。

<南三陸町・気仙沼市>

津波の被害甚大地域。鉄骨だけが残る建物、あらゆる物が流れ又流れ着き、生活に必要  
だった物が全て瓦礫と言われるものに化している。言葉を失う。物だけでなく、多くの  
人が津波にさらわれ犠牲者となった。ライフラインが絶たれ、避難生活が困難を極めて  
いる。

高台にある、ベイサイトアリーナ（総合体育館）や小・中・高校の避難所では多数の  
人がひしめきあっている。

・南三陸町：志津川高校避難所でサポートをしている T さんが知り合った、S さんとの繋がりで、被災した知的障害を持つ息子と家族の支援。3 世帯と出会う。決められた時間にしか入浴が出来ない自衛隊による入浴の手伝い（2 件）。被災前は、父親と祖父母が本人に愛情一杯で生活してきたのが一変し、日が経つにつれて家族も疲弊気味になり、少しの休息が欲しかった祖父母。本人にとっても気分転換になるのでは、と山間部にある公園へドライブをする。

入浴の手伝いを依頼した家族は、両親も非常に精神的に不安定になっている印象を受ける。

・気仙沼市：毎日通所していた施設も被災し、今までのように通所が出来なくなった重症心身障害者。自宅は内陸部にあるため無事だったが、自宅に長くいることで体調や精神面で調子を崩し、家族も先の見えない日々不安を感じリズムある生活の支援の依頼。

※この地震、大津波で生き残った人は、住んでいた地域の惨状を目の当たりにしながら今もその地域で日々生活が続いている。津波に流されていく人を見ながら必死で何とか逃げた人も多い。本当に、惨状を極めている。

★都市部と違い、法人が大きな施設を構え、そこを利用している利用者さんや家族にはしっかりと支援をしているようだが、横との繋がりが薄いと感じた。つなぎの部分を担当機関や人が少ない。他の施設の状況は、ライフラインの途絶えも影響しているかもしれないが、法人や施設同士が詳しく現状や状況を把握出来ていないのを感じる。

言葉を使ってもコミュニケーションが取りにくい障害者は、その思いや気持ちを周囲へ未だしっかりと周囲へ伝えきれない人もいるのだろう。目に見えるものから、生活のリズムまでもが変わってしまっている生活。その生活がいつまで続くか分からないという不安もあるだろう。

今までは地域で生活が続けていた人も、避難所での生活を余儀なくすることになり、初めてしんどさを抱えている人も多数いる。自分や家族から「助けて欲しい」という発信も出来ずにいる人もいるだろう。「周りの人の皆被災しているし、自分だけがしんどい思いをしているのではない」と言い聞かせている人もいるだろう。

今回の活動では、今の生活で少しでも困ったことがあり、支援が欲しいと思っている人、家族を訪ね、現地で（なるべく近場）支援をしてくれる機関、団体、人につなげていきたかったが、現地の人も被災している。たすけっとのスタッフが新たなその支援にあたっていかなければならないケースが殆ど。今後も、今までのような生活に戻るにはかなりの時間を要することだろうし、又新たに生活を築いていかなければいけない。既存の支援機関で足りる支援が出来るのも、余裕はないのではないか。今は、出来るだけボランティアな

どの形での途切れない人員、支援を細くも長く続けていくことが必要。

被災地障がい者センターみやぎについて（CIL たすけっとホームページより抜粋）

被災地障がい者センターみやぎは、「東北関東大震災障害者救援本部」及び阪神淡路大震災を教訓に生まれた「NPO 法人 ゆめ・風基金」の全面的なバックアップを受け、宮城県内の被害状況の調査、ニーズの把握、金銭的・物的・人的救援を考えています。

障がい者が避難できているか、避難所で暮らしているか、日常活動の場所などに破損はないか、必要な物資はあるか、などという課題が、置き去りにされがちになります。そうした困難やニーズに対して、迅速かつ細やかに「顔の見える関係」「つながり」を大切にしながら救援物資や救援金・人員をお届けしたいと思います。

CIL たすけっとについて（ホームページ <http://blog.canpan.info/tasuketto/>より抜粋）

どんなに重い障がいがあっても、地域であたりまえな生活がしたい！！

そんな思いの障がい者が集まり、障がい者自身が運営している団体です。

同じ障がい者の視点で、障がい者の地域生活（自分らしい生活）をサポートいたします。

被災地障害者センターみやぎのボランティア活動の拠点となっている CIL たすけっと。

規模は小さいですがそこで働くスタッフの皆さんの人柄と献身的な努力には頭が下がる思いでいっぱいです。皆さん「良い人」を絵に描いたような人柄で、現地に行ったスタッフの中には「CIL たすけっとのスタッフは、皆さんいい人達ばかりで、見習うべきところが沢山あると感じました。この人達に出逢うだけでも価値があると思います」という感想を漏らした人もいたほど。ボランティアが日々の活動で凄惨な光景を目の当たりにしても無事に活動を終わることが出来るのは事務所に帰って彼らからパワーをもらっているからかもしれません。これからも大変な日々が続くことと思いますが、くれぐれもご自愛くださいますよう心よりお祈り申し上げます。



その人はね、一度何か失敗して落ち込むとこの世は終わりだとばかりに自分の世界に入り込み、なかなかその世界から抜け出そうとしないんだ。その人がよく言っていたのは『自分が悪いから』『自分のせいだから』って自分が・・・自分が・・・になって、そして更に落ち込み自分の心の迷路に迷い込んでしまう。これって悪循環だよな。

一つの失敗で物事全てがゼロになってしまうから 0 か 100 ではなく 1 の大きさを知るっていう事の大切さをその人に感じて欲しいしそして何より失敗は今の自分の力を知るとても良いチャンスなんだよね。そう、絶好のチャンス!!!

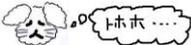
その人は僕に『ピンはさあ~、おちこんだりする事ってないの?』って聞くから僕はこう答えたんだ。『そりゃ~僕もおちこんだりする事もあるよ。人知れず涙する・・・なんてこともね。でもね、いつまでもおちこんでる訳にいかないんだよ。自分の世界に入り込む程におちこむエネルギーがあるんだったら 次どうしていけば良いかを考え、そして工夫していくことへのエネルギーに変えていった方がよっぽど気分が楽になるんじゃないかなーって。僕はそう思うんだけどねー。』その人は目を輝かせながら僕にこういったんだ。

『素敵なことだわ—————!!!』『私もうこれからおちこまないし大丈夫!!!』

..... あちゃ—————..... 一気に 100 になっちゃったよ.....

その人の『大丈夫』は本当は『大丈夫』じゃないんだけど.....

だからさあー、1 の大きさを知るって大切だよってさっき言ったじゃん.....

もおおお————— 

賛助会にご協力お願い致しますっ！



賛助会員の皆様、ご協力いただきましてありがとうございました。

なお、賛助会費を御振込いただく場合は下記の郵便振替口座にお振込み願います。

一口：2,000円

振込先(加入名): そうそうの杜 口座番号: 00940-5-185986

賛助会費（平成23年1月15日～平成23年4月21日にご支援いただいた方）

曾谷 幸子	飯田 富美子	玉那覇 歩	橋本 鶴夫	甲斐 広宣
有馬 映子	久保 健	植田 彌生	市川 毅	伊勢木 理英
宮崎 正宏	車戸 漾子	倉川 晴子	佐藤 友子	富吉 富美恵
東 貴美子	吉川 雅子	国本 光子	神田 昭次	水谷 春美
森 愛子	塩本 省三	中村 博昭		

(敬称略、順不同)

一般寄付（平成23年1月15日～平成23年4月21日にご支援いただいた方）

(株)ペアグ	藤原 静江	吉見 重則	竹本 伊津子	日比野 清
荒井 洋一	石井 敏一	春本 静良	春木 重光	永島 健一

(敬称略、順不同)

その他、地域の方々に牛乳パックや様々な物品等、ご寄付を頂いておりますことを心より感謝申し上げます。

---

---

# 社会福祉法人 <sup>もり</sup> そうそうの杜

大阪市城東区鳴野東3丁目18-5

Tel : 06 - 6965 - 7171 Fax : 06 - 6167 - 2622

ホームページ : <http://www.sou-sou.com> E-mail : [sou-sou@gol.com](mailto:sou-sou@gol.com)

**地域生活支援センターあ・うん 相談支援事業 居宅介護支援事業**

**とことこと 居宅介護・重度訪問介護・移動支援**

大阪市城東区鳴野東 3-18-5

Tel 06-6965-7171 Fax 06-6167-2622

**庵げんげん 生活介護**

(主)大阪市城東区中央 1-6-23(庵)

Tel/Fax 06-6935-0909

(従)大阪市城東区蒲生 3-11-10 マサキビル 1F(げんげん)

Tel/Fax 06-6935-1727

**伝 児童デイサービス**

大阪市城東区蒲生 3-11-10 マサキビル 2F

Tel/Fax 06-6930-6540

**創奏座座 就労移行支援・就労継続支援 B 型**

(主)大阪市城東区中央 1-7-27(創奏)

Tel/Fax 06-6935-3794

(従)大阪市城東区鳴野西 4-17-23(座座)

Tel/Fax 06-4258-6013

**つむぎ館 就労継続支援 B 型**

大阪市城東区関目 1-14-21

Tel/Fax 06-6933-7269

**今福事業所 就労移行支援・就労継続支援 B 型**

大阪市城東区今福西 6-3-8

Tel/Fax 06-6933-0737

**想縁綾 ケアホーム**

大阪市城東区内3ヶ所

**添 短期入所施設**

大阪市城東区鳴野西 5-18-13

Tel/Fax 06-6965-1235

**大阪市つどいの広場事業 だんだん**

大阪市城東区中浜 3-22-9 ラシーヌ中浜 1F

Tel/Fax 06-6961-5505

## 編集後記

いつになく編集に気を使う機関紙になりました。私も仙台に行ってきました。それゆえに難しく感じます。自分が体感したことと行くまでに伝え聞いたこと、それぞれの間には天と地ほどの差がありました。百聞は一見にしかずとはよく言ったものです。一瞬で全てを無に還した自然の力。それを少しずつ、しかし確実に元に戻そうとする人の力、現地ではその両方を感じました。

いつか復興を遂げた時、今回訪れた地域をもう一度訪ねていこうと思います。その時、自分は何を感じ、何を思うのか。まずは自分の出来る事を一つ一つやってみようと思います。(は)

